

三重県鈴鹿市方言の後部3拍複合名詞の アクセントについて(2)*

平田 秀

キーワード：三重県鈴鹿市方言、後部3拍複合名詞、一③型、一②型

要旨

鈴鹿市方言における後部3拍複合名詞アクセント規則は、以下のようなバリエーションがみられる：稲生地区では、高起式の場合、語末から数えて3拍目にアクセント核がおかれる(一③型)。低起式の場合、語末から数えて3拍目にアクセント核がおかれるものと、語末から数えて2拍目にアクセント核がおかれる(一②型)ものに分かれる。玉垣地区では、高起式・低起式に関わらず、語末から数えて3拍目にアクセント核がおかれるものと、語末から数えて2拍目にアクセント核がおかれるものに分かれる。一②型の出現は、平安期京都方言のアクセント規則が鈴鹿市方言において部分的に残存しているものと考えられ、玉垣地区のアクセント規則は、稲生地区と対照してより古形を強く保持していると言える。

1. 本論について

三重県鈴鹿市方言における後部3拍複合名詞アクセント規則について述べる。同方言は、上野善道(1987)、中井幸比古(2002)で述べられている通り、現代京都市方言、大阪市方言、神戸市方言、津市方言、伊勢市方言などと同じく中央式諸方言に属する。

本論は、鈴鹿市稲生地区方言について述べた平田(2010)の続編という位置づけであり、平田(2010)で扱わなかった鈴鹿市玉垣地区¹方言について詳述し、鈴鹿市方言におけるバリエーションについて、その位置づけを考察するものである。

第3節で先行研究で扱われている現代京都市方言・鈴鹿市稲生地区方言のアクセント規則についてみたのち、鈴鹿市玉垣地区方言のアクセント規則について詳述する。その後第4節で前述3方言と院政期京都方言を加えた4方言について比較・対照による位置づけを論じる。第5節はまとめである。

2. アクセント体系

鈴鹿市方言のアクセント体系は、現代京都市方言と同様の体系²であり、以下の(1)(2)の特

* 本稿の執筆に当たり、上野善道先生、小林正人先生に貴重なご指導をいただいた。また、話者の男性に長時間にわたる調査にご協力をいただいた。ここに記すとともに、深くお礼申し上げる。なお、本稿におけるいかなる誤りも筆者の責任である。

¹ 旧河芸郡玉垣村。話者は、玉垣地区在住の80代の男性である。

² 現代京都市方言のアクセント体系については、中井(2002: 12-14)を参照。現代京都市方言にみられる1拍語短形H1型および低起式の語末拍に核を持つ語における最終拍の拍内下降はみられないと

徴を持つ (cf. 平田 2010)。

- (1) 下げ核³を持つ。以降本論では単に「核」と呼ぶ。
- (2) 核がない限り文節の最初から高く続く高起式と、低く始まり核のある拍で上昇し、核がないときは文節末の拍で上昇する低起式の2つの式⁴を持つ。

(1)(2)の実現する音調表記を、(3)(4)に示す⁵。1つの型について、単独形及び第3節で詳述する【順接】の付属語「が」「です」が付いた形の3種を示す。‘[’で上昇、‘]’で下降を示す。語例が得られなかった型については、○を用いて推定される音調表記を示す。

(3) 音調表記・高起式 (5拍語まで)

	1拍語 短形	長形	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
H0型	[蚊。 [蚊ガ。 [蚊デス。	[蚊一。 [蚊一ガ。 [蚊一デス。	[ニワ。 [ニワガ。 [ニワデス。	[ツクエ。 [ツクエガ。 [ツクエデス。	[ゴチソー。 [ゴチソーガ。 [ゴチソーデス。	[ダイドコロ。 [ダイドコロガ。 [ダイドコロデス。
H1型	[葉。 [葉ガ。 [葉デス。	[葉一。 [葉一ガ。 [葉一デス。	[ヤ]マ。 [ヤ]マガ。 [ヤ]マデス。	[オ]トコ。 [オ]トコガ。 [オ]トコデス。	[ザ]ブトン。 [ザ]ブトンガ。 [ザ]ブトンデス。	[ア]クセント。 [ア]クセントガ。 [ア]クセントデス。
H2型			[〇〇]ガ。 [〇〇]デス。	[ニワ]シ。 [ニワ]シガ。 [ニワ]シデス。	[エニ]ツキ。 [エニ]ツキガ。 [エニ]ツキデス。	[ミギ]ヒタリ。 [ミギ]ヒタリガ。 [ミギ]ヒタリデス。
H3型				[ソノヒ]。 [ソノヒ]ガ。 [ソノヒ]デス。	[トブク]ロ。 [トブク]ロガ。 [トブク]ロデス。	[アイコ]トバ。 [アイコ]トバガ。 [アイコ]トバデス。
H4型					[アクルヒ]。 [アクルヒ]ガ。 [アクルヒ]デス。	[ゴミスチ]バ。 [ゴミスチ]バガ。 [ゴミスチ]バデス。
H5型						[アタマノケ]ガ。 [アタマノケ]デス。

(4) 音調表記・低起式 (5拍語まで)

	1拍語 短形	長形	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
L0型	木。 木[ガ。 木デ[ス。	木一。 木一[ガ。 木一デ[ス。	ハ[リ]。 ハ[リ]ガ。 ハ[リ]デ[ス。	ウサ[ギ]。 ウサ[ギ]ガ。 ウサ[ギ]デ[ス。	オイワ[イ]。 オイワ[イ]ガ。 オイワ[イ]デ[ス]。	アリアワ[セ]。 アリアワ[セ]ガ。 アリアワ[セ]デ[ス]。
L2型			ア[メ]。 ア[メ]ガ。 ア[メ]デ[ス]。	イ[チ]ゴ。 イ[チ]ゴガ。 イ[チ]ゴデ[ス]。	エ[ハ]ガキ。 エ[ハ]ガキガ。 エ[ハ]ガキデ[ス]。	カ[ゲ]ヒナタ。 カ[ゲ]ヒナタガ。 カ[ゲ]ヒナタデ[ス]。
L3型				トン[ボ]。 トン[ボ]ガ。 トン[ボ]デ[ス]。	キイ[チ]ゴ。 キイ[チ]ゴガ。 キイ[チ]ゴデ[ス]。	アカ[イ]ンク。 アカ[イ]ンクガ。 アカ[イ]ンクデ[ス]。
L4型					アカン[ボ]。 アカン[ボ]ガ。 アカン[ボ]デ[ス]。	ナガシ[カ]ク。 ナガシ[カ]クガ。 ナガシ[カ]クデ[ス]。
L5型						〇〇〇〇[ト]。 〇〇〇〇[〇]ガ。 〇〇〇〇[〇]デ[ス]。

いった細かな差異はあるが、本論の論旨には影響しない。
³ 次の拍を下げる働きを持つ。上野(1992: 11)を参照。拍とは、上野(2006: 2)で述べられている、アクセントの長さを構成する単位であり、鈴鹿市方言ではモーラと一致する。
⁴ 「高起式」・「低起式」は和田實(1942: 10)の用語である。「高起式」に「平進式」、「低起式」に「上昇式」といった異なる用語をあてる先行研究もある(cf. 上野 1989)が、本論では鈴鹿市方言の記述において平易であるという理由から、和田(1942)の用語を用いる。
⁵ 語例は、鈴鹿市稻生地区方言のものを用いる。

1拍語には母音を延ばさない短形と、母音を延ばして発音する長形が存在する。本論では、後者の長形はアクセントのふるまいの上では2拍語として扱う。

n拍語において、H0型とHn型、L0型とLn型は名詞単独の言い切り形では同じ音調となるが、(3)(4)に示した通り、【順接】の付属語「-が」「-です」の付いた形では有核型の語においては核による下降が現れ、差異が生まれる。2拍語のL0型とL2型を例にとると、2拍語L0型「針」と2拍語L2型「雨」は単独の言い切り形ではハ[リ。 ア[メ。 と音調は同一となる。しかし、【順接】の助詞を付けるとL0型ではハリ[ガ。 ハリデ[ス。 と上昇の起こる拍が文節の末尾拍へとずれるのに対し、L2型ではア[メ]ガ。 ア[メ]デス。 と、単独形と変わらず「雨」の2拍目で上昇が起こり、対立が生まれる。

ここで全ての型に「アルファベット1字」+「数字1字」の名称を付ける。アルファベットがHならば高起式、Lならば低起式であることを表す。数字は核の位置(1拍目、2拍目…)を表す。無核型の場合数字は0とする。

また、後ろから数えて何拍目に核があるかを問題にする場合に、一と丸囲み数字を用いて核の位置を表す。「-③型」は後ろから数えて3拍目に核のある型を表す。無核である場合①型とする。必要に応じて、「高起式-③型」のように式と組み合わせる。

3. 後部3拍複合名詞

本節では、「夏祭り」「ゴミ袋」のような後部3拍複合名詞⁶のアクセントについて述べる。

なお、本論で扱う後部3拍複合名詞には、「真っ盛り」「血だらけ」のような、前部要素・後部要素が単独で用いられないものも含まれる。また、後部要素間には生産性の高い「-袋」「-祭り」、生産性の低い「-めくら」「-役所」のように、生産性に差が見られるが、その差についても本論では分析の対象外とする。

3. 1 先行研究

3. 1. 1 現代京都市方言

現代京都市方言における後部3拍複合名詞アクセント規則は、以下の(5)に示す通りである(中井1987: 48)。

(5) 現代京都市方言では、後部3拍複合名詞は高起式・低起式を問わず-③型で出る。

3. 1. 2 鈴鹿市稲生地区方言

鈴鹿市稲生地区方言における後部3拍複合名詞アクセント規則は、以下の(6)~(8)に示す通りである(平田2010: 42-43)。

(6) 高起式の場合、-③型で出る。

(7) 低起式の場合、-③型で出るものと-②型で出るものに分かれる。

⁶ 中井(2002)に掲載されている語を中心とした全1594語。

(8) (7)において、低起式-②型で出る複合名詞の後部要素は、以下の a~c の特徴を持つ。

- a. 後部要素が複合名詞であり、その単独形が高起式・低起式を問わず-②型である。
この場合、高起式においても-②型で出る。
- b. 後部要素が「-祭り、-休み」のような動詞からの転成名詞である。
- c. 後部要素が「-油、-袋」など特定の語である。

3. 2 アクセント型と所属語彙数

まず、鈴鹿市玉垣地区方言について、表1にアクセント型と各型の所属語彙数を、表2に逆算指定によるアクセント型と各型の所属語彙数を示す。

表1 後部3拍複合名詞のアクセント型と所属語彙数（玉垣地区）

		0型	1型	2型	3型	4型	5型	6型	7型	8型	9型	10型	計	二単位形
4拍語	高起式	25	2	21	10	0	-	-	-	-	-	-	58	0
	低起式	13	-	27	6	0	-	-	-	-	-	-	46	
5拍語	高起式	77	2	8	253	103	0	-	-	-	-	-	443	6
	低起式	45	-	1	66	87	0	-	-	-	-	-	199	
6拍語	高起式	14	0	0	1	151	27	0	-	-	-	-	193	9
	低起式	2	-	0	1	28	42	0	-	-	-	-	73	
7拍語	高起式	6	0	0	0	0	347	28	0	-	-	-	381	14
	低起式	0	-	0	0	0	65	46	0	-	-	-	111	
8拍語	高起式	0	0	0	0	0	0	26	2	0	-	-	28	1
	低起式	0	-	0	0	0	0	5	4	0	-	-	9	
9拍語	高起式	1	0	0	0	0	0	0	9	2	0	-	11	1
	低起式	0	-	0	0	0	0	0	2	2	0	-	4	
10拍語	高起式	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	-	0	0
	低起式	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	-	0	
合計	高起式	122	4	29	264	254	374	54	11	9	0	0	1121	31
	低起式	60	-	28	73	115	107	51	6	2	0	0	442	

表2 後部3拍複合名詞の逆算指定によるアクセント型と所属語彙数（玉垣地区）

	-①型	-②型	③型	-④型	-⑤型	合計
高起式	122	172	814	11	1	1121
低起式	60	187	193	2	0	442
合計	182	359	1007	13	2	1563

表1中の「二単位形」とは、「前後左右」[ゼ]ンゴ+サ[ユ]ウ 3拍H1型+3拍L2型のように、複合名詞のアクセントが一つにまとまらず、二単位に分かれて出るものである。本論では、これらの二単位形はアクセント規則の適用外にあるものとして扱う。

表2に示したように、まず814語出現した高起式-③型の多さが目立つ。193語出現した低起式-③型についても、187語の-②型とほぼ同じながらも、低起式において最も多く出現した型である。よって、-③型が数の面では無標な型であると言える。

次の3.3節で、これら後部3拍複合名詞のアクセントにどのような規則性がみられるかを考察する。

3. 3 アクセント規則

鈴鹿市玉垣地区方言の後部3拍複合名詞のアクセント規則は、以下の(9)の通りである。なお、3.2節の表1、表2で示した通り、(9)の規則に従わない例も一定数みられるが、それらについては3.5節で追って詳述する。

(9) 高起式・低起式ともに、-③型もしくは-②型で出る。どちらの型で出るかは、後部要素が決定する。

(9)は、3.1.2節で述べた、高起式では-②型が出現しない鈴鹿市稲生地区方言のアクセント規則と異なるが、高起式・低起式ともに-②型が出る後部要素の特徴は、(8)に示した鈴鹿市稲生地区方言において低起式-②型の出現する条件と同一である。

(10) = (8)

(9)において、-②型で出る複合名詞の後部要素は、以下のa~cの特徴を持つ。

- a. 後部要素が「-庭師」など複合名詞であり、その単独形が高起式・低起式を問わず-②型である。
- b. 後部要素が「-祭り、-休み」のような動詞からの転成名詞である。
- c. 後部要素が「-油、-袋」など特定の語である。

(11)~(14)に実際の語例を、音調表記と型を付けて示す。続く3.4節に(11)~(14)の詳細を記す。

(11) 高起式・低起式ともに-③型で出る例

- 会社 (単独形はL0型) 高起式 [ガスガ]イシャ(5拍H3型)、
[ウンソーガ]イシャ(7拍H5型)
低起式 ジドーシャ[ガ]イシャ(7拍L5型)、
レコード[ガ]イシャ(7拍L5型)

(11)のように、高起式・低起式ともに-③型で出る例は、3.2節で示した通り無標のパターンだと考えられるため、以降本論の考察からは外すものとする。

(12) 高起式・低起式ともに-②型が出現する、後部要素が複合名詞でありその単独形が-②型である例(10a)

- 庭師 (単独形はH2型) 高起式 [ニセニワ]シ(5拍H4型)
低起式 ニワカニ[ワ]シ(6拍L5型)

(13) 高起式・低起式-②型が出現する、後部要素が動詞からの転成名詞である例(10b)

- 祭り (単独形はH0型) 高起式 [ハナマツ]リ(5拍H4型)、
[ユキマツ]リ(5拍H4型)

低起式 アキマ [ツ] リ (5拍 L4 型)、
サンダイマ [ツ] リ (7拍 L6 型)

cf. 高起式 [ナツマ] ツリ (5拍 H3 型)

(14) 低起式-②型が出現する、後部要素が特定の語である例 (10c)

-袋 (単独形は H1 型) 高起式 [ゴミブク] ロ (5拍 H4 型)、
[フトンブク] ロ (6拍 H4 型)、
[カイモノブク] ロ (7拍 H5 型)

低起式 テサゲブ [ク] ロ (6拍 L5 型)、
オマモリブ [ク] ロ (7拍 L6 型)、
カンニンブ [ク] ロ

cf. 高起式 [ノシブ] クロ (5拍 H3 型)

低起式 ポリ [ブ] クロ (5拍 L3 型)

(13)(14) で示したように、(10) の特徴を持つ後部要素でも-③型で出るものもあるが、(13)(14) で出現している、現代京都市方言で出現しない高起式・低起式双方の-②型、鈴鹿市稲生地区方言で出現しない高起式-②型が、表 2 で示したように鈴鹿市玉垣地区方言においてまとまった数で出現することは、大きな特徴と言える。

-②型で出るものについて、次節で詳細を述べる。

3. 4 -②型で出る語について

-②型で出る語は、(10) で述べた通り、

- a. 後部要素が「-庭師」など複合名詞であり、その単独形が高起式・低起式を問わず-②型である。
- b. 後部要素が「-祭り、-休み」のような動詞からの転成名詞である。
- c. 後部要素が「-油、-袋」など特定の語である。

の特徴を持つ。本節では、上記 a~c のそれぞれについて語例を挙げつつ詳述する。

まず、(10a) に該当する後部要素を (15) に示す。

(15) 後部要素が複合名詞であり、その単独形が高起式・低起式を問わず-②型である後部要素 (全 4 例) :

後部要素	単独形	語例
-つき機 ⁷	L2 型	[モチツキ] キ (5拍 H4 型)
-庭師	H2 型	[ニセニワ] シ (5拍 H4 型)、ニワカニ [ワ] シ (6拍 L5 型)
-八分	H2 型	[ムラハチ] ブ (5拍 H4 型)
-針師	L2 型	ニワカハ [リ] シ (6拍 L5 型)

(15) に示した後部要素全 4 例は、それ自身が複合名詞であり、複合名詞全体の核の位置は後部要素の核に由来すると考えられる。

なお、「後部要素が既に複合語である場合、その核が保存される」という現象は、細かい差

異はあるものの、東京方言や現代京都市方言にも存在する(上野 1997: 239)。

次に、(10b)に該当する後部要素が動詞からの転成名詞である例を扱う。まず、表3に、②型および③型で出た語について、後部要素が転成名詞であるものとそうでないものの数を示す。

表3 後部3拍複合名詞の後部要素の語種

	後部要素の語種		
	転成名詞	非転成名詞	合計
高起式-②型	92	80	172
低起式-②型	101	86	187
高起式-③型	187	627	814
低起式-③型	19	174	193
合計	399	967	1366

表3に示した通り、「②型で出たものについて、後部要素が動詞からの転成名詞である割合が高い」という強い傾向が見られる。ただし、後部要素が転成名詞の場合でも高起式-③型が187語、低起式-③型が19語出ている。

表4に、式を問わず②型が出現した動詞からの転成名詞である後部要素を示す。表中の「○」は該当する型に所属する語が出現したことを、「-」は語例が得られなかったことを表す。

表4 ②型が出現した転成名詞である後部要素(全111例)

高-②	低-②	高-③	低-③	該当数	後部要素
○	○	○	○	3例	-遊び、-話、-拾い
○	○	○	-	13例	-集め、-合わせ、-掛かり、-係、-知らず、 -たたき、-試し、-違い、-使い、-はざみ、 -はずれ、-祭り、-回り
○	○	-	○	1例	作り
○	○	-	-	9例	-飾り、-かじり、-比べ、-揃い、-倒し、 -足らず、-詰まり、-開き、-回し
○	-	○	○	1例	-思い
○	-	○	-	5例	-当たり、-構え、-狂い、-探し、-混じり
○	-	-	○	2例	-すまし、-離れ
○	-	-	-	29例	-歩き、-急ぎ、-覚え、-卸し、-下ろし、 -稼ぎ、-代わり、-崩れ、-砕け、-下し(くだし)、 -くるみ、-殺し、-さされ、-さらし、-障り、 -しのぎ、-調べ、-育ち、-つかみ、-直し、 -流し、-残り、-踏まず、-勝り、-まとめ、 -磨き、-休め、-別れ、-渡し

高-②	低-②	高-③	低-③	該当数	後部要素
-	○	○	○	0例	
-	○	○	-	17例	-炒め、-祝い、-生まれ、-返し、-重ね、 -嫌い、-暮らし、-さらい、-騒ぎ、-すくい、 -疲れ、-払い、-任せ、-見舞い、-戻り、 -休み、-破り
-	○	-	○	0例	
-	○	-	-	31例	-明かし、-上がり、-恨み、-踊り、-屈み、 -限り、-かぶれ、-代わり、-食わず、-さばき、 -触り、-絞り、-潰し、-流れ、-なじみ、 -慣らし、-並べ、-にらみ、-寝入り、-ねだり、 -望み、-のぼり、-運び、-弾き、-光り、 -ひたし、-太り、-曲がり、-結び、-めくり、 -揺すり

表4中の「遊び」は、高起式-②型の水遊び [ミズアソ]ビ(5拍H4型)、低起式-②型の海遊び ウミア[ソ]ビ(5拍L4型)、高起式-③型の川遊び [カワア]ソビ(5拍H3型)、低起式-③型のどろんこ遊び ドロンコ[ア]ソビ(7拍L5型)のように、4つのパターンが全て得られたことを示す。

「集め」は、高起式-②型の票集め [ヒョーアツ]メ(5拍H4型)、低起式-②型の寄付金集め キフキンア[ツ]メ(7拍L6型)、高起式-③型の切手集め[キツテア]ツメ(6拍H4型)は出現したが、低起式-③型の語は出現しなかったことを表す。

次に、表5に表4で扱った後部要素の単独形を示す。

表5 ②型が出現した転成名詞である後部要素 単独形

高-②	低-②	高-③	低-③	該当数	H0型	H1型	H2型	L0型	L2型	不使用
○	○	○	○	3例	1	1	0	0	1	0
○	○	○	-	13例	4	4	1	0	4	0
○	○	-	○	1例	0	0	0	0	1	0
○	○	-	-	9例	5	2	0	0	2	0
○	-	○	○	1例	0	1	0	0	0	0
○	-	○	-	5例	2	0	0	0	3	0
○	-	-	○	2例	0	1	0	0	1	0
○	-	-	-	29例	9	9	4	1	5	1
-	○	○	○	0例	0	0	0	0	0	0
-	○	○	-	17例	6	7	1	0	3	0
-	○	-	○	0例	0	0	0	0	0	0
-	○	-	-	31例	17	8	0	0	6	0
				111例	44	33	6	1	26	1

表4~表5に示した通り、(10a)の複合名詞のケースとは異なり、後部要素単独形の型は-②型の出現に関与していない。また、どの型で複合名詞が出るかのパターンの選択にも関わつ

ていない。

続いて、(10c)に該当する後部要素を表6に示す。続けて、表7に後部要素単独形の型ごとの数をまとめる。

表6 後部要素になると一②型が出現するもの(全92例)

高-②	低-②	高-③	低-③	該当数	後部要素
○	○	○	○	1例	-袋
○	○	○	-	11例	-油、-売り場、-葉、-言葉、-仕事、 -所、-柱、-畑、-林、-不足、 -娘
○	○	-	○	1例	-兎
○	○	-	-	0例	
○	-	○	○	1例	-花火
○	-	○	-	15例	-親父、-敵、-カメラ、-心地、-心、 -支度、-印、-俵、-力、-テレビ、 -枕、-真面目、-眼、-柳、-ラジオ
○	-	-	○	0例	
○	-	-	-	14例	-戦、-置き場、-煙、-しぶき、-捨て場、 -多数、-壘、-だらけ、-近く、-隣、 -乗り場、-はしご、-一つ、-めくら
-	○	○	○	3例	-以内、-機嫌、-野球
-	○	○	-	22例	-頭、-うどん、-鞆、-企業、-車、 -苦勞、-小僧、-試合、-次第、-時代、 -姿、-頭巾、-卵、-地方、-時計、 -ドラマ、-値上げ、-二つ、-葡萄、-曜日、 -ラクダ、-旅行
-	○	-	○	1例	-四角
-	○	-	-	23例	-当たり、-苺、-いびき、-刀、-瓦、 -個人、-こぼし、-サラダ、-式部、-自慢、 -雀、-すみれ、-狸、-たわし、-戸棚、 -なすび、-鼠、-年度、-日なた、-部隊、 -緑、-役所、-野菜

表7 -②型が出現した転成名詞である後部要素 単独形

高-②	低-②	高-③	低-③	該当数	H0型	H1型	H2型	L0型	L2型	不使用
○	○	○	○	1例	0	1	0	0	0	0
○	○	○	-	11例	5	4	0	0	2	0
○	○	-	○	1例	0	0	0	1	0	0
○	○	-	-	0例	0	0	0	0	0	0
○	-	○	○	1例	0	1	0	0	0	0
○	-	○	-	15例	4	7	0	1	3	0
○	-	-	○	0例	0	0	0	0	0	0
○	-	-	-	14例	8	0	1	1	3	1
-	○	○	○	3例	0	2	0	1	0	0
-	○	○	-	22例	12	7	1	0	2	0
-	○	-	○	1例	0	0	0	0	1	0
-	○	-	-	23例	2	8	0	5	8	0
				92例	31	30	2	9	19	1

これらの語も、複合名詞の後部要素になると-②型で出る性質を持っていると考えられる。転成名詞の場合と同様に、同じ後部要素を持つ複合語全体をみると-③型でも出るものも含まれる。表7で示したように、後部要素の単独形は関与していない。

最後に、-②型と-③型の出現条件が、標準語でみられるような、特殊モーラが音韻的に弱くアクセント核を担えないために核の位置が左にずれる現象⁸とは異なることを示す。

後部要素が3拍であるという前提で、特殊モーラによって-②型と-③型が分かれる現象が起こるとするならば、「-②型が基本で、語末から2拍目が特殊モーラの場合、核の位置が左にずれて-③型で出る」という仮説を立てることになる。これを表8で検証する。

表8 特殊モーラと複合名詞の型 (○は通常のモーラ1つ、Mは特殊モーラ1つを表す)

	高起-②	高起-③	低起-②	低起-③	合計
-○○○	172	565	184	87	1008
-○M○	0	249	3	106	358
合計	172	814	187	193	1366

表8で示したように、まず語末から2拍目が特殊モーラでありながら-②型で出る例が低起式で3語(新年度 シンネ[ン]ド、水曜日 スイヨ[-]ピ、何曜日 ナンヨ[-]ピ)出現している。また、語末から2拍目が通常のモーラであっても-③型が出現している例が高起式で565語、低起式で87語出ている。

⁸ 上野(2003: 74)では標準語において-③型が基本である外来語を例に取り、
語末から3拍目が通常のモーラ -③型 /オーストラ`リア/、/ロサンゼ`ルス/
語末から3拍目が特殊モーラ -④型 /ワシ`ントン/、/バンク`ーバー/
のように核の位置が1つ左にずれる例が挙げられている。

仮に「本来-②型であるものが、次末拍が特殊モーラであることによって-③型へと変化する」ならば、次の表9のような分布を示すと考えられる。

表9 特殊モーラと複合名詞の型 (○は通常モーラ1つ、Mは特殊モーラ1つを表す)

	高起-②	高起-③	低起-②	低起-③
-○○○	(語例あり)	0	(語例あり)	0
-○M○	0	(語例あり)	0	(語例あり)

よって、先に立てた仮説は成り立たず、-②型の出現に特殊モーラは関与していないと言える。

3. 5 アクセント規則の例外

本節では-③型・-②型以外の型で出る、アクセント規則の例外となる語について述べる。

3. 5. 1 ①型の出現について

①型は高起式で122例、低起式で60例出現しているが、表に示した通り、拍数の短いものに集中して出現しており、拍数が長くなると出現頻度が極端に落ちる型であるため、①型の出現は生産的な規則としては認めないこととする。

3. 5. 2 -④型の出現について

-④型は高起式で11語、低起式で2語出現しており、

a. 前部要素が1拍であるもの：

全2語(座布団 [ザ] プトン 4拍 H1型、四時間 [ヨ] ジカン 4拍 H1型)

b. 並列複合語であるもの：

全2語(上り下り ノボ[リ]クダリ 6拍 H3型、上げ下ろし ア[ゲ]オロシ 5拍 L2型)

c. 重複形であるもの：

全1語(所々 トコ[ロ]ドコロ 6拍 L3型)

d. a・bにあてはまらない例外：

全8語(雨合羽 [アマ]ガッパ 5拍 H2型、稲光 [イナ]ピカリ 5拍 H2型、長続き [ナガ]ツツキ 5拍 H2型、七不思議 [ナナ]フシギ 5拍 H2型、花盛り [ハナ]ザカリ 5拍 H2型、花畑・[ハナ]バタケ 5拍 H2型、頬被り [ホー]カムリ 5拍 H2型、山崩れ [ヤマ]クズレ 5拍 H2型)

aは、前部要素が1拍であるという拍数の短さが関与していると考えられる。b、cは語構造から特殊な型であるという説明を付けることができる。dの8例については、個別に例外的な型で出ているとみなす。

3. 5. 3 -⑤型の出現について

-⑤型は、以下に示す2語が得られた。

真っ盛り [マ] ッサカリ (5拍 H1 型)、蝶番 [チョ] ーツガイ (5拍 H1 型)

以上2語の-⑤型は、語末から4拍目が特殊モーラであるために生じた、3.5.2節のdで述べた個別的な例外の-④型に準じる型としてとらえられうるが、例外的な型で出ていることに変わりはない。

4. 鈴鹿市方言における古形保持の度合いの差

第3節で示した現代京都市方言、鈴鹿市稲生地区方言、鈴鹿市玉垣地区方言の後部3拍複合名詞アクセント規則を(16)~(18)に再掲する。

(16) = (5) 現代京都市方言では、高起式・低起式を問わず-③型で出る。

(17) = (6)(7) 鈴鹿市稲生地区方言では、高起式では-③型で出る。低起式では-③型で出るものと-②型で出るものに分かれる。

(18) = (9) 鈴鹿市玉垣地区方言では、高起式・低起式を問わず-③型もしくは-②型で出る。

鈴鹿市方言における、現代京都市方言にみられない-②型の出現は、(19)の院政期京都方言の後部3拍複合名詞アクセント規則が保持されているととらえることができる。

(19) 院政期京都方言では、高起式・低起式を問わず語末から数えて2拍目に下げ核がおかれる⁹(桜井茂治 1975: 169、佐藤栄作 1998: 559)。

(19)に示した古形から、高起式・低起式問わず全ての語が-②型から-③型へと、核の位置が左へずれる音変化を経てできたのが現代京都市方言であるのに対し、高起式では全ての語に核の位置が左へずれる音変化が起こったが、低起式の語では一部の語を-②型のまま残して-③型へ変化した状態が鈴鹿市稲生地区方言の状態、高起式・低起式ともに-③型から-②型への変化の途上の段階にあるのが鈴鹿市玉垣地区方言の状態だとそれぞれまとめられる。よって、玉垣地区方言は、稲生地区方言と対照してより古形を強く保持しているととらえられる。

表 10 三重県鈴鹿市方言におけるバリエーションの位置づけ

	←古形		新形→	
	院政期京都	鈴鹿市玉垣	鈴鹿市稲生	現代京都市
高起式	-②型	-②型/-③型	-③型	-③型
低起式	-②型	-②型/-③型	-②型/-③型	-③型

⁹ 院政期京都方言のアクセント体系に付いては、2種の式と2種の核を用いる上野(1977: 314)の解釈をとる。

5. まとめ

本論では、三重県鈴鹿市玉垣地区方言のアクセント規則を詳述し、院政期京都方言、現代京都市方言、鈴鹿市稲生地区方言との比較を行い、現代方言における古形の保持の度合いによる位置づけを論じた。

鈴鹿市方言における一②型の出現のモチベーションや、他の中央式諸方言において鈴鹿市方言と同様に一②型が出現するものの有無については未だ不明である。今後解決をめざす課題としたい。

参考文献

- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店: 281-321.
- (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2)」『日本学士院紀要』42-1: 15-70.
- (1989) 「日本語のアクセント」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』明治書院: 178-205.
- (1992) 「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-14.
- (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子監修, 国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫編『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂: 231-270.
- (2003) 「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』朝倉書店: 61-84.
- (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 桜井茂治 (1975) 『古代日本語アクセント史論考』桜楓社.
- 佐藤栄作 (1998) 「語構造とアクセント型」秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版: 552-562.
- 中井幸比古 (1987) 「現代京都市方言のアクセント資料 (2)」『アジア・アフリカ文法研究』16: 45-98.
- (2002) 『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.
- 平田秀 (2010) 「三重県鈴鹿市方言の後部3拍複合名詞のアクセントについて」『東京大学言語学論集』30: 39-50.
- 和田實 (1942) 「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協会会報』71: 10-13.

The Accent of Compound Nouns Ending in Three-Mora Elements in the Suzuka Dialect of Japanese (Mie Prefecture) 2

HIRATA Shu

Keywords: Suzuka dialect of Japanese, compound nouns ending in three-mora elements, pattern -3, pattern -2

Abstract

The Suzuka dialect of Japanese (Mie Prefecture) shows the following variations of the accent rules of compound nouns ending in three-mora elements. In the Ino district, compound nouns in the high-onset (*kouki-shiki*) group have the kernel (the peak after which the pitch falls) on the antepenultimate mora (Pattern -3) and some words in the low-onset (*teiki-shiki*) group have the kernel on the antepenultimate mora, while the others have it on the penultimate mora (Pattern -2). In the Tamagaki district, regardless of the groups of the compound nouns, the kernel falls on the antepenultimate mora in some words, while it falls on the penultimate mora in the others. The appearance of Pattern -2 implies that the rule of the Kyoto dialect in the Late Heian period is partially preserved in the Suzuka dialect and we argue that the distribution of the patterns in the Tamagaki district shows a closer similarity to the rule of the Kyoto dialect in the Heian period than to that of the Ino district.

(ひらた・しゅう 博士課程)